



ろりぽっぷ泉中央南園
仙台市認可保育園



子どもの心を大切に保育園と幼稚園を営む。ログハウスの園舎がシンボル。

大きな大きなログハウスは 子どもたちの安心安全の拠点

「子どもたちのために何かを」。園のみんなと作り手の思いが一つになって木の園舎に。出来上がったログハウスは安心安全の拠点になった。



園の仲間が作ってくれた。



子どもたちと造ったピオトープ。



自動ロックがつく玄関。



玄関にはスロープがつく。



中庭の築山を見る。木工の汽車は保育士さんたちの手作り。



中庭から5歳児室を見る。左は家庭菜園。



デッキはレストランに。子どもたちが自家野菜で作るピザも並ぶ。



菜園は子どもたちが育てる。



正面から見る。幅は20m超ある大きな大きなログハウス。



中庭側からの遠望。こちらから見た長さは約30mもある。

保育園の園舎として活躍するログハウス

仙台駅から地下鉄で北へ。震災時、津波が届かなかった市内陸部も宅地の被害を聞くが、地上に出た車窓からその痕跡を探すのは、今や、難しいよう。列車は、ほどなく終点に。

その泉中央駅は、周囲を宅地広がる丘陵地に囲まれる。ここ泉区は、人口増加が続き、近年の発展目覚ましく、それでも、自然環境が豊かに残されているのが魅力だ。

その区民の憩いの場、七北田公園、七北田川を目の前に建つのが、大きな大きなログハウス。大きな大きな羽を広げて、卵を守るお母さん鳥のようにも見える。

そして、建物を前にして耳を澄ますと、聞こえてくるのは…

子供たちの元気な声！

ここは、ろりぽっぷ泉中央南園。そう、木の家は、保育園の園舎として使われ、活躍しているのだ。

子どもたちに本物をそのひとつがログハウス

「子供たちが、1日の大半を過ごすこの場所、本物にふれさせてあげたいんです」

そう語るのは園長の佐藤さん。その前には、本物の川が流れます。そこでは季節の移ろいを感じます。春、散歩した道が夏には葉っぱで埋め尽くされる。それが

秋には赤く色づき、冬には氷が張る」

子供たちは、本物に触れると、心が揺さぶられ、感性豊かに育つという。考える力がつき、自己決定できるようになる。それは生きる力の基礎ではないかと。

「ログハウスは「本物の木の家」です。子供たちは、朝来ると『木のおいがするう！』と元気よく入って来るんですよ」

木の園舎で子どもたちはイキイキと育つ。上履きを脱いで、裸足で駆け回りたがる。長い木の廊下では雑巾がけだつて楽しい。まるで競うように一気にガー！っと。

広々としたデッキは、子どもたちの手にかかれ、あつという間にレストランに。「ここで食べると、ピーマンだって、すぐ食べられるようになったんですよ」

実はログハウスは、まったく初めての試みというわけではなかった。同じ学校法人の最初の園が仙台市若林区沖野にある。ここで3年前に平屋で2クラス分増築をした。それがサエラホームのログハウスだった。

「木の家で育つ子供たちの姿に、保護者の皆さんも喜んでくださっています」

2か所目は絶対ログハウスにしよう！それが理事長以下みんなの思いになった。そして、実現したのが、この園。去年の春のことだ。

プランでは「オープン」を重視 みんなでつながるように

子供たちの部屋は全部で6部屋。0歳児、



気持ちのよい木の廊下。



オープンな遊戯室。



木のおもちゃは保育士さん手作り。



3歳児室と4歳児室のスライドドアを開け放つと広々とした空間になる。



1歳児室。1歳とは思えないほど、みんなたくましい。

オーナーさんからの“一言”

保護者の方に安心してもらえる園舎になったと思います。特に、震災の経験から、地震への強さは心強く、まず、自分自身が安心を感じているところです。子どもには安心安全を提供できるので、今は、沖野で3棟めを建てているところです。



引き戸は、足元に段差のない吊り戸に。



木の階段が数字を教えてくれる。

ちだった。子どもたちの手を引き隣の小学校4階へ。幸い、仙台東部道路が堤防となり津波は食い止められた。だが、道路の向こう側は何もなくなってしまった…！

「ですから、地域の皆さんが集まるログハウスの保育園にしたいんです」

去年の秋まつりには、ご近所が集った。敬老の日、隣の老人ホームで踊りを披露したらおばあちゃんたちと仲良くなれた。

「子どもたちは『おばあちゃんにお花を届きたい』って、川原で摘んでくるんです」

木の家で人はつながる。

そこは安心安全の拠点になる。

こんなこともある。

「ここに移動してから、震度3〜4を経験しましたが、怖さを感じませんでした」

太い材で壁入全体を組み上げるログハウスは、地震に強く耐震性能が高いのが特徴。

「まず、自分で安心を感じます。安心安全そのものの中で過ごしているよう。だから子どもたちに安心をあげられます」

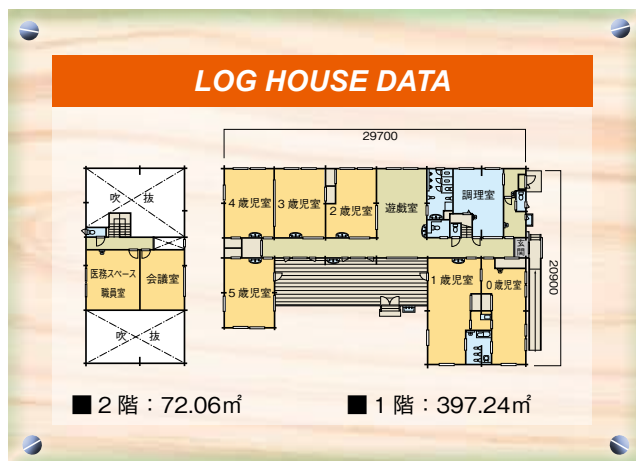
安心安全には特に気を配った。子どもの同



0歳児室。木の家特有の安心感。



5歳児室。落ち着いてお絵かきや工作を。



線を考え、メーカーに伝える。メーカー・サエラホームはプロのアドバイスを。階段やデッキの高さ。フロアはフラットに、そのため段差のない吊り戸を活用する。

「サエラさんは、打ち合わせのために、何度も、何度も足を運んでくれました」

施工した大工さんいろいろな相談に乗ってくれた。丸味を帯びた手すりに。角という角にも丸味をつけてくれた。

「みんな『子どもたちのために何かをしたという』その気持ちを共有できたんです」

木の家は、その思いに込める。

子どもたちは、その「あったか味」の中でのびのびと遊ぶ。無垢な身体は、きっと、素直に感じとっていることだろう。

それが「ホンモノ」なんだと。

その思いはご近所にも向けられる。地域にもオープンにしたい。

前年の体験で知ることになった。平成23年3月11日14時46分。沖野の園は強い揺れに襲われた。やがて飛来したヘリコプターは津波の襲来を警告する。

「子どもたちを避難させない」と！

その時、命を守ってくれたのは近所の人たち

人がつなげる木の家は安心安全の拠点に

1歳児の部屋は、法定により34〜39㎡と大きい。調乳スペース、沐浴スペースがあり、乳児用トイレが設けられる。2歳児〜5歳児は、30㎡ずつの同タイプで、お昼寝の布団をしまえる押入れを備え付ける。

注目は3歳児と4歳児の部屋の間仕切り。スライドドアになっていて開け放すとオープンな空間がぼつかり広がる。ここでは、みんななでつながるように考えている。

「小さい子は大きい子を見て学び、大きい子は小さい子に自然と優しくなれます」

子どもは、子どもどうして学び合っ、だから、壁は作りたくなかった。

遊戯室は扉がなく、廊下とひと続きになっていて、すべての部屋とつながる。

「オープン」は、今回のプランで特に意識したところ。できるだけ仕切りは少なく、みんななでつながるように考えている。